

優秀作品賞

「大切な人を悲しませないために。」

三野宮 翔さん

私には、植物状態で生きながらえた叔母がいます。彼女は父の妹で、昨年二月に亡くなりました。脳梗塞を患って以降、約十五年もの間、植物状態でした。母と同じ年の叔母は、早くに旦那さんに先立たれたため、子供もいません。「誰にも迷惑を掛けることなく、穏やかに生涯を閉じたいわ。」が彼女の口癖でした。彼女は、公務員として、懸命に職務に取り組んでいました。今思えば、旦那さんを失った穴を、仕事で埋めようとしていたのかもしれませんが。父は五人兄弟の次男ですが、姉を、彼女が小学校の頃に交通事故で、兄を、彼が働き盛りの三十代に脳卒中で、弟を、彼が二十歳の頃に大学の夏合宿の水難事故で、それぞれ亡くしました。祖父母も亡くなり、父にとって叔母だけが、この世でたった一人の肉親となりました。その叔母の体調に異変が見え始めました。時々なのですが、会話の途中で呂律が回らなくなるのです。他人に弱みを見せようとしない、気の毒なほど気丈に振る舞う叔母が、うまく喋れない自分に戸惑い、その顔が曇ります。でも、そこに大きな病が隠れているとは、誰も気づきませんでした。もしも、前兆に気づいて検査に行っていたなら、その後続く、終わりの見えない戦いを避けることが出来たのかもしれませんが。一人暮らしの住まいで、叔母は倒れました。職場に来ない彼女を心配して、上司から我が家に連絡が入り、母が、倒れている叔母を発見。しかし、それはあまりに遅すぎました。治療の甲斐もなく、叔母は、いつ目覚めるかも分からぬ、長い眠りについてしまいました。それから十五年、途中、延命措置を止めるか否か、病院から問われたこともあったそうですが、父は僅かな希望を捨てることは出来ませんでした。十五年、言ってしまうえばあっけないものですが、本人はもちろん、それ以上に、父と母の苦勞たるや、筆舌にしがたいものだったに違いありません。延命措置の継続を決めた際、父の脳裏に浮かんだのは、「この状態で、無理やり生かされて、妹は幸せなのだろうか。また、自分たちが先に逝って、子にこの苦役を残してしまったら、どう詫びればいいのか。やはり、ここで止める

べきなのだろうか。」という事だったそうです。叔母が息を引き取り、悲しみに浸る余裕なく、通夜や葬儀の準備にバタバタした時を過ごしましたが、火葬の日、今まさに叔母の骨が焼かれているその時に、誰もいない屋外で、一服しながら涙する父を見つけました。小雪降る寒い日だったので、雪が頬を伝っただけなのかもしれませんが。たったひとりの肉親を亡くした辛さに耐え、「苦勞かけて申し訳なかったね。長い間、同じ年の麗子（叔母）の面倒を見てくれて、本当にありがとう。」と母に詫びた父。でも、きっと、どんなカタチであっても、叔母に生きていて欲しかったはずです。もう二度と、父のこんな悲しい涙は見たくありません。だから私は、元気で生き続けるため、逆縁の不幸にならないため、定期的に健康診断に通うことを、人生の「やることリスト」に加えました。ちょっと神経質かな、と思うくらいが、健康のためにはちょうどいい。今は、そんな風に考えています。起きたきり老人として、この先も、大切な仲間との縁を紡いでいくために。